50

医学・医化学の発展と教育
（特にその制度史）

柴田幸雄・工藤幸子・田中　伸

明治期における日本の医学教育の発展と戦後における教育の変換、さらには二十一世紀への進展についての問題点を整理して考えて見度いと思う。先に本学会などを通して色々問題提起をしてきた。（医史学会、同志社家政学会、言語、地理）未来を考える時、その過去の是非も整理せねばならない。そもそも日本における医学教育は「ドイツ」、「オランダ」医学に端を発し（勿論江戸時代以前の中国医学―陰陽五行説等もあるが）、さらにその教育の根底には水戸学（ヴィクター・コシュマン、水戸光圀の大日本史、藤田東湖の弘道館、そして北畠（バタケ）親房の大義名分）があるが、戦後GHQによりすべて消し去られた。戦前の教育は欧米のキリスト教に代るものとしての教育勅語の発布、天皇名もすべて覚えた（ある意味ではよかったと思う）。戦後特に理科社会は単元制と成りタテワリがきえた。特に生物と地理においていちじるしい。生物では分類が少なく地理では地誌が少ない。本年一月九日、国立科学博物館分館で「動物分類学―内部からの提言」というシンポジウムがあり、又最近掛算（カケザン）の九九も余りおぼえなくてもいいという方がいらっしゃる。今後どうなるかと思う。アメリカで二世の人が「九九」を英語で教えると計算が早くなったといわれていたのだが!!　私は昭和十年四月の尋常高等小学校入学なので読方は「サイタ　サイタ　サクラ　ガ　サイタ」であり、算術はミドリ表紙で、四年生からは「四ツ珠」のソロバンが入り「割算の九九」は消えた。昭和十六年（私は三月卒業中学校へ入ったが）、国民学校への移行のため、中学校の教科書は新旧併用、博物学、動物学、植物学、鉱物学と共に新制の生物、物理学、化学と共に物象I、II、と混乱（この当時生化学の荒木先生と生理学の橋田先生が関係しておられる）しかも四年生の時、五年生と共に卒業となったので、二十一年は中学五年生の卒業はなく、二十二年は私達の次の学年が五年生として卒業、二十三年から男女共学の新制高校生が

出てくる。最近「旧制高校生の東京敗戦日記」が出たが、新制と旧制のちがいが一般の人には理解されておらずテレビでも混乱している。日本生化学の歴史については昨年発表したが、私は二十一世紀が「分子生物学の時代」だと思っているが（ちなみに二十世紀は物理学の世紀であろう）、医学部では生理化学すなわち医化学が必要であると思う。しかし私の勤務先の愛知医科大学が出発した当時（昭和四十七年）全国八十校の医科大学のうち八校が医化学であったが大学院大学設立にともない色々の名前が使われ、一寸理解に苦しむこととなった。しかし生物学は矢張り分類からはじめ（比較解剖学もなくなった）順序よく教えることに併行してトピック的に討議する事も必要と思う。従って日本人として従来行なわれていた「四書五経」、「古事記」、「六国史」、「四鏡」も教えるべきであろう。アメリカでは移民の時アメリカ史と英語を課している。ドイツ語の不規則動詞表を夏休みにおぼえた事もある。最近水戸黄門の実在を知らなかったり（勿論フィクションもある）、よく使われる「ナキニシモアラズ」も児島高徳の中にある詩だという事も消えている。アメリカでポーランド人が私に「日本人は何故自分の国を悪くいうのか」といったが、これも考えるべきであり、日本の神話も知るべきだし、学術語ももっと日本語をはっきりすべきであり、減反、二百海里、クジラ等も食料科学的に考え、政治にふりまわされてはいけない。

（愛知医科大学）